

世界の光と陰をシンプルに書き記す人

矢口以文詩集『詩ではないかもしれないが、
どうしても言っておきたいこと』に寄せて

1
矢口以文^{よひぶ}さんは、詩をシンプルに書くことを追求してきた詩人だ。その研ぎ澄まされた詩業は、人間の真実や世界の不条理を語らざるを得ない激しい衝動を感じさせてくれる。またこの自己の立場を明言する潔さは、様々な他者との交流体験を経てきた後に辿り着いた達観のようにも考えられる。そして矢口さんのシンプルな陰影の濃さは、日本人の曖昧さを意志的に振り切りながら、世界の混沌さを切り裂く光と陰を問うてくる。その問いそのものが詩となり、根源的なものとなって読むものに迫ってくる。

矢口さんと知り合ったのは、二〇〇八年の春頃だった。東洋大学で水崎野里子さん、郡山直さん、結城文さんたちが英詩を読む会を開いたことがあり、『原爆詩一八一人集』の英語版を担当してくれた三人だったこともあり、私も聴衆の一人として参加した。多くのバイリンガル詩人の中でも矢口さんの詩朗読とスピーチは何か別格だった。その発音の音楽のような美しさに聞きほれ、隣の友人に話すような自然で自信に満ち溢れた会話力にも驚かされた。会の後に初めて話をす

初めての人物だったのだろう。エッセイ集の一章に引用された詩「Hidden Christians」は、キリシタン大名の小西行長が、関が原の戦いで破れ曝し首にされた後に、その一族が北上流域に落ち延びて隠れキリシタンになったことに関わる詩だ。檀家の信者の墓に十字架が隠されて刻まれていたことを祖父が打ち明けられた詩だった。祖父を通して人間にとって祖霊信仰、宗教、宗派とは何かを問いかけている詩だった。矢口さんにとって祖父から学んだことは計り知れないほどの精神的な財産であったのだろう。エッセイの題名を直訳すると「つばさ——打ち鳴らされた大気」とでもなるのだろうか。矢口さんは、祖父の寺に響き渡る鐘の音に込められた天空への願いに敬意を表してこのようなタイトルをつけたのかも知れない。

矢口さんの母は、そのような祖父の子であるにも関わらずクリスチャン系の看護学校に通っている。矢口さんは後にその不思議さに気づいたが、祖父にそのことを聞くことはなかったという。母は関東大震災の時に多くの被災者の救援活動をしたという。矢口さんの父は母の婿養子であった。しかし父は神道の熱烈な信者であり、矢口さんを連れて朝早くから神社に通い奉仕活動をしていた。矢口さんもまた朝の行事に同伴して戦勝祈願をしていた息子であった。父は徴兵されて軍務に着いたが身体を壊して家に帰され、終戦の年に四十二歳で病死した。五人兄弟の中の弟と妹も亡くなった。戦後に

ることができた。私が詩誌「コールサック」などを手渡すと、矢口さんは英語の詩集とエッセイ集が米国の出版社から刊行されたので、送ってくれると言ってくれた。しばらくすると自伝的なエッセイ集『The WingBatten Air: My Life and My Writing』と詩集『The Poetry of Yofjumu Yaguchi』が送られてきた。とてもシンプルな英語であり、辞書を時々引けば読み進めることが可能だった。矢口さん自伝的な英文エッセイ集は九章に分かれていて、エッセイの中には自作の詩も挿入されていた。一章には、祖父と両親のことが書かれてあった。母方の祖父について矢口さんは人生に決定的な影響を受けた人物として、特別な思いを記している。祖父は山形県の裕福な農家に生まれたが、山々を巡り歩く山伏となり、厳しい修行をして仏教の世界を極めていった人物だった。曹洞宗の僧侶になり北海道の旭川でも布教をしていたという。そんな祖父だが不思議なことに神道の神主の娘である祖母と結婚し子を成した。祖父は宮城県石巻市の北上川流域の観音寺を引き継いで、その場所でも多くの信者たちから慕われていた。祖父には特別な靈感があったらしく、病んだ人を癒したり、信者の死期を予知したり、信者の霊がやってくる事を察知したりする特異なシャーマン的な能力を備えていたという。矢口さんは祖父の寺に遊びに行き地獄絵を見たり、祖父の蔵書にある忍者の書物などに関心を持ち、静かな寺の雰囲気が好きだったという。矢口さんにとってこの祖父の存在はきつと詩的な靈感を与えてくれる

なって母が残された三人の子供を育てることがどんなに大変だったかを矢口さんは書き記している。後になぜ矢口さんが良心的な徴兵拒否を信条とするクリスチャンとなり、戦争と平和を考える詩を書き続けているかは、この英文エッセイ集によってその根拠が明らかにされている。矢口さんにとって思想・宗教が生きることに於いて大切な意味を持ち、いかに切実なものであるかが痛感されるエッセイ集だった。

2

矢口さんのように詩作と自分の生き方がこれほど緊張感を保って相互影響を与えている詩人は、現代の詩人において数少ない。その意味で言うと矢口さんの詩は、とてもシンプルで分かりやすく、英語で鍛えられた伝達する詩思想が日本語の詩においても生かされている。

第一詩集『冬の神話』は、一九六七年の三十代前半に札幌で刊行された。その前年の一九六六年には初めての英文の第一詩集『A Shadow』も刊行されていた。この二冊はどちらも私家版で、三十代前半の矢口さんが詩作を生涯の課題として宣言した記念すべき詩集になったろう。日本語詩集『冬の神話』の中に英文詩集のタイトルと同じ意味の「陰」という詩があるので引用してみたい。

僕の生れる前 夜の明りの
差し込まぬ部屋の中に、
ない隙間を通って、風のように
忍びこんできた陰が、
吸取紙に吸取られる夜のように
秘かに僕の中に入り込んだ、
少しも僕に気付かれず、
僕の血よりずっと濃く 僕の
体より遙かに大きな奴が、
その陰が僕の中にすっかり
入り切った時、不意に 女陰の
荒々しく引き裂かれる音が
焔を供って響き、
僕を死人のように眼覚ませた、
僕の生れる前 いや
種子として宿されるもつと前。

矢口さんの思考の中には、「僕の生れる前」の遙かな存在の根源に辿り着こうとする混沌としたエネルギーが噴出しているようだ。「忍び込んだ陰」が「秘かに僕の中に入り込んだ」こと、矢口さんの詩作の原点には、この得体の知れない生命の根源を「陰」として掴まえようとする衝動

死んだとんび達が
舞っている
飢えて 飢えて 飢え切っていて
鞭の風が 一度び雑ぐと
凧のように 地辺にたたきおちる程
疲れ切っている
死んだとんび達が
舞っている
ゆるやかな線を描き
喉にしのばせた笛を
囁きのように吹き鳴らして
そして夢見る
彼らの鋭い槍の嘴が
まもなく
眼下で 弱り切って立っている
馬達の横腹から 血のしたたるままの
肉を ちぢりとして
啄む事を
そして
雑草も 笹の葉も すっかり
雪に埋もれてしまった大地では
死んだ馬達が

があるように感じられた。父と母の性愛の背後に秘められて宇宙の生命の営みを視野に入れようとしている。母の「女陰の／荒々しく引き裂かれる音が／僕を死人のように眼覚ませた」という詩行には、矢口さんの独特な死生観が示されている。生命を産む母とそれを引き裂く父が、死者である自己を目覚めさせ命を与えたという。自分がかつて死者であったのであり、現在はたまたま死者が目覚めている存在なのだと言っている。つまり死者という陰と生者という光が存在し、陰と光によって構成される命が共存している存在として自己を規定しているように思われる。

矢口さんは、先にも触れたように僧侶の家系にもかかわらず仏教徒にはならず、英文学の教師を勤めながらクリスチャンとなり、北海道札幌市に今も暮らしている。十代・二十代の混沌とした精神世界を抱えながらも、米國留学での様々な他者を知った経験を第一詩集に閉じ込めたのだろう。その独特な死生観を抱える混沌とした陰のエネルギーは、生涯にわたり矢口さんの詩作と生き方に緊張感を与えながら反復されている。

第一詩集のタイトル詩「冬の神話」は、「死んだものたち」への親密な関係が語られている矢口さんの原点が刻まれている詩だ。

冬の神話

立っている
飢えて 飢えて 飢え切って
死ぬ程
弱り切った
死んだ馬達が
膝の上迄 雪に埋もれて
立っている 決して
倒れず 決して
臥そうとする気配さえ みせず
じつと立ち続ける
永遠のように続く
暗い雪の世界に
死んだ馬達が
死んでしまっても

この詩の世界は、東北や北海道の雪国の祖霊の飢えの記憶を矢口さんが実感を持って甦らさなければ不可能だったろう。しんと降り積もる雪の世界の中で、飢えたとんび達と飢えた馬達が最後の戦いをする直前の場面だ。この酷寒の世界のただ中でも、天上のとんび達は優雅に雪空を舞い、地上の馬達は気高く立ち続ける。雪は天上と地上をつなぐ舞台装置だろう。こんなに飢えたものたちは、死んでしまっているのだろうか、奇跡のように読むものに実在しているかのように

姿を現してくる。世界の飢えの極限の姿を書き記すことが、矢口さんの詩の世界の試みであるのだ。死んだものは飢えを抱えながらこの天上を舞い地上に立ち竦んでいる、というイメージが読む者の心に迫ってくる。この世は死んだものと生きているものが相互に入れ替わってしまう、不可思議な世界であるという事実を淡々と語っているのだろう。眼には見えないけれども心の眼には見えるのであり、その極限の実相から人間が試されている存在であると、矢口さんは物語っているようだ。

3

第一詩集『冬の神話』を刊行した後は、数冊ほど私家版の詩集を出したが、正式に出版社から一九七二年に刊行したものが第二詩集『にぐるの大きな女』だった。この詩集には、矢口さんの米留留学経験が詰まっていて、一人ひとりの人間を受け止める深い眼差しが特長なのだ。詩「黒人霊歌」を引用してみる。

黒人霊歌

黒人霊歌を聞いたことがある。立派なステージの上の堂々とした物腰の 有名な歌手の歌う 観客むけの歌をではな

く、僕の知り合った ある黒人の若者の歌うのを。

スラムで生まれ 犬ころのように捨てられ 十代で麻薬にふけたという彼が ぶた箱の中でも 外でも 秘かにいつでも くちずさんでいたという歌だった。歌いながら 始めは笑っていた彼の顔が 次第に 歪んでいったのだ。いつか彼の眼が涙で溢れ それがぼろぼろ 彼の黒い頬の上を流れ始めたが、彼はぬぐいもせずに歌い続けたのだ。

底なしの泥の沼の中にはまりこんで そこから必死に這いあがるうともがきながら 真黒な長い手を上に差ししのべるのだが ずるずる 沈みこんでゆく そんな絶望の声が まるで地獄の底からの呻きのように 響いたのだった。

口を揃えて 首をゆすりながら いい気になって ハミングしていた僕達はみんな一斉に口をつぐんでしまい、海のような沈黙があたりを領したのだ。そして途切れながらも彼は歌い続けたのだ。遂には涙で歌うことができなくなるまで。

いつもここにこして、暗い陰を見せたことのなかった彼 親しみ易い 人のいい彼、体の岩のようにながしりしている彼、その彼は その時はまったく誰も寄せつけぬ孤独の塊りになってしまい 顔一杯に 震えるような淋しさを溢れさせて 殆ど崩れ落ちんばかりだったのだ。

黒人の苦しみをかかなりの程度理解していると言っていた僕は この思ってもみなかったほどの絶望の深淵をのぞき

みさせられて もう彼を慰める言葉を一つも見つけることができず、僕の中にあつた薄っぺらな同情 頭の中だけの黒人理解が音たてて崩れ落ちるのを聞きながら、深淵に取り囲まれている彼を遙か遠くにいるかのように 茫然と眺めるだけだった。

矢口さんは例えばシド・コーマン、ジョン・ホーランド、アン・セクストン、R・S・トーマス、W・スタフォードなどの多くのアメリカの詩人たちの詩集を翻訳し刊行してきた。また一九八四年に刊行された評論集『アメリカ現代詩の一面』では、アメリカとイギリスの詩人達との一対一の交友関係からその詩人たちの素顔を描き、その詩作の秘密を解き明かそうと試みている。そんなアメリカの現実である人種差別の痛みを、身を持って知ったことがこの第二詩集の多くの詩篇に書き記されている。その中で最も印象に残った詩篇がこの「黒人霊歌」だ。「絶望の深遠」を黒人青年がだんだんと絶唱していく姿はとても感動的だ。この詩はこの青年だけに留まらないうで、貧しく差別されて生きている人々を勇気づけ、差別するものの特権意識に自省を促す、矢口さんの詩論のような詩だろう。戦時中に父を亡くし戦後社会の底辺で生きた経験を原点とする矢口さんだからこそ、アメリカの黒人青年の「絶望の深淵」に仮託しながら、人間の一人ひとりに存在する絶望の意味をも語りかけているのだ。例えば黒人青年を差別す

る人間の心に存在する無意識の絶望を抉り出しているともいえる。真の絶望を知ることによって、より良き希望が立ち上がってくることを矢口さんのこの詩は問いかけてくるのだらう。

その他の日本語詩集では、一九七八年に『夜の木立』、一九八五年に『先祖たち』、一九八七年『イエス』（日本語版、英語版の二冊）、一九九三年に『呼ぶ声』、一九九七年に『目を覚ましている木』、二〇〇三年に『周辺の人々』、二〇〇四年に『天国の宴会』などを刊行している。『夜の木立』の詩の「ざんごう」では、少年を殺した兵士の苦悩を書き記し、決して忘却できない戦争責任を問うている。『先祖たち』の詩「先祖たち」では、自分の先祖であった強盗、小作人、地主、坊主、山師などが酒盛りしながら、矢口さんの生き方を槍玉に挙げている詩だ。『呼ぶ声』の「あるフィリピン女性からの手紙」では、日本の詩人のアンソロジーを読んだフィリピンの詩人からの視点で書かれた詩だ。そこで日本人はフィリピン近海で魚を乱獲し自分たちの生活を脅かしていることに無自覚で、どうして「自分たちの美意識だけを満足させるような芸術作品だけを書き続けられるのでしょうか」と記されている。『目を覚ましている木』の「確信に満ちていた」では、原爆投下などの戦争やテロで人間を殺す時に「神の命令に従った」と言い張る人間の言葉の意味を問い続ける詩だ。この確信に満ちた言葉を吐きながら戦争やテロの悲劇を繰り返

返す人間の絶望を明らかにしている。『周辺の人々』の連作詩「草苗さんが語るアイヌの着物」や「サケ汁」などでは、先住民のアイヌの人々の心に肉薄して、異なる文化を畏敬することの大切さを示している。『天国の宴会』の詩「ライケンの銅版」では、矢口さんが信仰している十六世紀にヨーロッパで酷い弾圧を受けた非暴力派アナバプテストの悲劇を記している。その詩を引用してみる。「人はどうしてこんなに残酷になり得たのか」という矢口さんの人間の深層に迫る深い問いが語りかけられる詩だ。

ライケンの銅版画

精密に描かれた絵の中に
処刑を行う者たちの顔が刻まれている。
炎に包まれる者たちを眺める
見物人たちの顔も刻まれている。

直接手を下す執行人たちの顔は
歪んで見えることもあるのだが
眺めている者たちの顔はしばしば
和やかで幸せそうだ。

水責め 火責め 首はね

争の悲劇を書き、後世に戦争が人間をどんなにか破壊させてしまうかを告げようとしている。第二章「神の心」は日常に出会う小さな命を慈しみながらも、その背後に戦争の悲劇や人間の愚かさを語り、さらに神を求める人間の心の謎を見詰めた二十六篇だ。第三章「故郷の言葉で」には、宮城の方言を使用しながら、原点である故郷の人間たちやその人間関係を赤裸々に語った十篇だ。第四章は矢口さんの詩論、反戦の思想的な論文、中国に招待された時の講演内容録と質疑応答やそれに関連する詩篇などだ。現役の詩人で矢口さんほど自らの詩思想を生きて実践している詩人はいないのではないかと、私には強く感じられた。詩集のタイトルも矢口さんらしい型破りで相応しいものだ。現代詩に絶望している方や、本来的な現代を見据えて、未知のより良き現代を創り上げていこうと考えている実践的な方には、ぜひ矢口さんの「どうしても言っておきたいこと」を読んでもらいたいと願っている。最後に詩集タイトル詩を引用してこの小論を終えたい。

詩ではないかもしれないが、

どうしても言っておきたいこと

—— 畏友のユダヤ系アメリカ詩人デニス・レバ

トフに——

一九八二年シャロンが国防相の時、レバノン 難民キャン

生き埋め 舌ねじり フォークの突き刺し——
見るごとに 手を叩き どっと沸く
喜びのどよめきが伝わってくる。
違った信仰を持ったからという理由で
昨日まで隣人であった者たちに
教会に行っている人たちがどうして
そのような仕打ちができたのか。

人はどうしてこんなに残酷になり得たのか。
殺すことが神のみ心だと信じたからか。
殺せと命じる神は
どんな神かと考えることはなかったのか。

3

新詩集『詩ではないかもしれないが、どうしても言っておきたいこと』は、四章に分けられて六十数篇の詩と散文が収録されている。一章「戦争中僕らの町に海軍航空基地があった」には二十四篇収められていて、矢口さんの戦争下の故郷での体験をベースに書かれた詩篇から始まり、日本人の戦争責任を問い続けながら、現在のアメリカの戦争行為を批判している詩篇などが書き記されている。どの詩も矢口さんは自らの内面を通過させて、切実な場面にその内面を仮託して戦

プ

キリスト教軍がパレスチナ人を虐殺するのを
イスラエル軍が黙認した。それを知った時、あなたは
憤りの叫びを上げ 地面を激しく踏んで大地を震わせた。

今は死の国に入ってしまったが、そこで目を大きく開いて
唇を震わせる気配が伝わってくる。デニスよ、あなたの声
に合わせて
私もイスラエルの首相を糾弾する、パレスチナの住宅を破
壊し、
土地を奪い、それに抗議をする者たちを牢に叩き込むことを、

テロに自爆されるたびに数十倍の報復を重ね、
爆弾と弾丸を撒き散らす軍隊を、
それを熱狂的に支持する者たちを。
「殺せ！神がわれらに与えたこの土地から彼らを抹殺せよ！

われらが安心してここで暮らして行くため！

それこそが神のみ心だ！」と主張する

シオン主義ユダヤ人たちの叫びが響いてくる。デニスよ、
あなたに もう少し長く生きていて欲しかった、

あなたの同胞の醜い姿をもう一度見て欲しかった。

虐待されるパレスチナ人の苦しむ顔を見て欲しかった。
悲しみの怒りを噴き出してほしかった。あなたがあの世で
このありさまを見て安眠できるはずがない。

ユダヤ人たちはアウシユビッツから何を学んだのか？

神に頼ることの愚かしさか？頼りになるのは憎しみと

武器だということか？アラブから土地を奪い自分たちだけ

の

国家を造ることか。デニスよ、あなたのため息は底が知れ
ない。